

ビデオアートプログラム

A Window to the World: 世界に開かれた映像という窓

第 27 回：シャハール・マークス 第 28 回：スッティラット・スパパリンヤ

新しい映像表現に触れることができる無料プログラム

「A Window to the World：世界に開かれた映像という窓」は、館内の無料スペースで、世界で活躍するアーティストたちによる映像作品を紹介するプログラムです。映像が映し出されるスクリーンを、距離的な隔たりを超えて世界で繰り広げられる試みと私たちとの回路を開く「窓」にたとえ、年間を通して先鋭的な表現を紹介しています。

第 27 回：シャハール・マークス

- 上映期間／2012年5月15日（火）～7月16日（月・祝）
- 上映作品／1,2,3,Herring 2011年 カラー、サウンド、2分27秒

自身が演じるパフォーマンスを軸に表現に取り組むシャハール・マークス。第二次世界大戦中の兵士に扮し、段ボールで自身の姿を象った3体の兵士と、子どもの遊び「だるまさんがころんだ」に興じています。撮影地は1948年、イスラエルの建国直後に勃発したエジプトとの戦争が起こった場所。事件が歴史化される過程で、さまざまな「操作」や「検閲」の視点が入り込んでいくことを、記念碑的の場に身を置き、自分の分身と戦うユーモアと皮肉を挟みながら再考を促します。

シャハール・マークス

1971年イスラエル、ベターティクヴァ生まれ、テル＝アビブ在住。パフォーマンス、映像、彫刻表現を横断しながら、自身の身体を介しての作品制作を行う。2009年エルサレム国際映画祭で実験映画賞を受賞。同年モスクワ・ビエンナーレ、2010年メディアーション・ビエンナーレなど国際展にも出品。

第 28 回：スッティラット・スパパリンヤ

- 上映期間／2012年7月18日（水）～9月17日（月・祝）
- 上映作品／シューティング・スターズ 2010年 カラー、サウンド、9分

画面に流れる無数の光と時折響く金属音。見るものを魅了するこの美しい映像が、実は2010年にタイ国内で起こったデモ隊と治安部隊との度重なる衝突から着想を得た作品だと知ったとき、映像に対する我々の印象は全く異なるものになるでしょう。作家はこの作品に映像というメディアがはらむ特性-現実を全く異なるものへと変換する危険性-を反映させています。現実から乖離した美しい映像を前にしたとき、我々は信ずべきものは何かを自問することになるでしょう。

スッティラット・スパパリンヤ

1973年、タイ、チェンマイ生まれ、同地在住。チェンマイ大学で絵画を学んだ後、ライブツィヒ視覚装丁芸術大学大学院でメディア・アートを学ぶ。2011年には、アジア・カルチュラル・カウンシルの助成を受けニューヨークに滞在、視覚芸術の調査を行なう。「第4回恵比寿映像祭」(2012)をはじめ、国際的に作品を発表。



シャハール・マークス
《1, 2, 3, Herring》
2011年



スッティラット・スパパリンヤ
《シューティング・スターズ》
2010年

上映作品：解説テキスト

シャハール・マークス／戦場のひとり芝居

ビデオの功績のひとつは、ひとたび限りのハプニングであった身体の動きを、映像に収め、幾度でも再生し繰り返すことができるようになったことだろう。パフォーマンスはこれによって持続可能な表現性を得るようになった。シャハール・マークスの作品は言ってみれば映像を舞台にした「ひとり芝居」、それなのだ。自身のパフォーマンスを映像に収める。すべて彼の身体で演じられ、表現される。ショートコントのような短編作品で、マークスは身体性を表現に取り入れた先人たちのアクションを度々引用している。例えば塀の上からダイブし、「空虚への跳躍」を試みたイブ・クラインに扮し（《信仰への跳躍》2010年）、ドリッピングを行うジャクソン・ポロックを演じる（《サビーク／Sabich》2006年）。マークス版ポロックは、揚げナスとゆで卵を挟むイスラエル風サンドイッチ、サビークを作るべく、床に広げた特大ピタパンに、絵の具ならぬ色とりどりのソースと具を撒き散らす。

シンディー・シャーマンが女性としての身体を通して世間が抱く女性のイメージを浮き彫りにし、森村泰昌が日本で生まれ育ったアジア人の身体を媒介に、歴史に触れ、関わっていったように、マークスはイスラエル人である自身の身体を歴史的、記念碑的事件の場所に置き、ユーモアの中にこの国に続く争いについて再考を投げかける。

《1,2,3,Herring（ニシン）》とは、「だるまさんがころんだ」と同じイスラエルの遊びのこと。この作品でマークスは1948年、イスラエル建国のそのときに勃発したエジプトとの戦場を再現し、兵士に扮して訝しげに辺りを見回しながら、厚紙で象った自分自身の姿とこの遊びに興じる。どちらが味方でどちらが敵か。いや、どちらも同じ、自身の分身と戦っているに過ぎないのだ。記念碑的な場所、歴史的な事象、それは往々に力ある者による操作と検閲によって1通りの語り方へと誘導されていく。この1種類のストーリーを揺るがし、史実に異なる解釈を加えるチャレンジを、このアーティストはまさに身体を張って試みている。（神谷幸江）

スッティラット・スパパリンヤ／メディアは嘘をつく

無数の光が暗闇の中をまるで流星のように静かに流れ落ち、時折響く金属音は映像を静謐で幻想的なものへと演出する。我々は画面に釘付けになってその光跡を追い、目を凝らして暗闇の奥に潜むものに思いを巡らせる。ところがこの映像、夜に走行する列車の窓から見える風景を映し出したものだと知れば、作品に対する我々の印象は変化するにちがいない。スパパリンヤは、車窓から見える夜の風景を90度回転させ、過ぎゆく沿線の光を画面の上から下へと流しているのだ。作家はこの作品に映像というメディアがはらむ特性—現実を全く異なるものへと変換しうる危険性—を反映させている。

情報を操る力を持つものは、現実のイメージを自分たちの都合の良いように変換することができる。為政者による統制、マスメディアによる編集や加工によって、情報の本質は歪められ、事実が異なる内容に操作される可能性を我々は知っている。2010年、バンコクでは、デモ隊と治安部隊の度重なる衝突が起り、多数の死者を出す。それにもかかわらず、「政府はマスメディアをコントロールし、問題は何も起きていないことにしようとした」とスパパリンヤは語る。その争いの後、チェンマイからバンコクに向かう列車の中でこの映像は撮影された。デモに参加するために列車で地方からバンコクへ向かった人々に思いを馳せた時、作家の中で光の流れは一転して死の光線へと印象を変える。デモの参加者の中には、かりそめの宿を求め、深夜の道端で身支度を整えている時に狙撃された者もいた。車窓を過ぎ去る光は、銃の照準を合わせるレーザー光線のイメージに結びついたのである。そして、銃撃後の地面に散らばる葉の音を映像に加え、恐怖とパニックを引き起こすはずのものに、平穏で静かな感情を抱かせる役目を担わせた。

作家は、自身が置かれた社会で得た着想を芸術的なメタファーで表現し、世相や政治的な問題を浮かび上がらせる。そして我々は、現実から乖離した美しい映像の前に、信ずべきものは何かを自問することになる。（齋藤武郎）

過去の「A Window to the World」

第26回：スミルハン・ラディック



2012年2月7日(火)
～4月22日(日)
オレンジ・ノイズ (2009年)

第25回：ラリッサ・サンスール



2011年11月29日(火)
～2012年2月5日(日)
スペース・エクソダス (出宇宙記)
(2009年)

第24回：山本 篤



2011年9月21日(水)
～11月27日(日)
2 dogs (2010年)

第23回：田村友一郎



2011年7月12日(火)
～9月19日(月)
NIGHTLESS (2011年)

■第22回：シンシア・マルセリ

2011年4月26日(火)～7月10日(日)
クルザーダ (2010年)

■第21回：佐藤義尚

2011年3月8日(土)～4月24日(日)
papers digital version (1991/2003年)、desktop (2005年)、
patterns (2009年)

■第20回：スキ・チャン

2011年1月18日(土)～3月6日(日)
スリープ・ウォーク・スリープ・トーク (2009年)

■第19回：マイケル・ベル＝スミス

2010年11月23日(火)～2011年1月16日(日)
セルフ・ポートレイト・ニューヨークシティー (2006年)、オン・ザ・グリッド
(2007年)、ビルディング・アクロス・フロム・グリッド ダー・ベン
ド (2008年)

■第18回：チョイ・カ・ファイ

2010年10月5日(火)～11月21日(日)
矩形の夢、シングルチャンネル・バージョン (2010年)

■第17回：ジアッド・アンタール

2010年8月24日(火)～10月3日(日)
トルコ行進曲 (2006年)、WA (2004年)、タンブーロ (2004年)

■第16回：崔廣宇 (ツイ・クアンユー)

2010年7月6日(火)～8月22日(日)
ショートカット・トゥ・ザ・システムティック・ライフ：シティー・スビ
リッツ (2005年)、不可視の都市：タイバリ・ヨーク (2008年)

■第15回：辻直之

2010年5月25日(火)～6月20日(日)
3つの雲 (2005年)

■第14回：トロビヨロン・ロッドランド

2010年3月13日(土)～5月9日(日)
132BPM (2005年)

■第13回：ニーナ・フィッシャー、マロアン・エル・サニ

2010年1月16日(土)～2月28日(日)
暗黒郷を綴る (2008/09年)

■第12回：ヤエル・バルタナ

2009年11月17日(火)～2010年1月15日(金)
震える時 (2001年)、宣言 (2006年)

■第11回：オルガ・チェルヌイシヨフ

2009年9月15日(火)～11月15日(日)
列車 (2003年)、楽しい夢 (2005年)

■第10回：トロマラマ

2009年7月18日(土)～9月13日(日)
セリガラ・ミリシャ (2006年)

■第9回：ジョルディ・コロメール

2009年5月23日(土)～7月17日(金)
アナーキテクトン (バルセロナ、ブカレスト、ブラジリア、大阪) (2002-04年)

■第8回：ホ・ツ・ニエン

2009年3月14日(土)～5月10日(日)
ボヘミアン・ラブソディ・プロジェクト (2006年)

■第7回：ブルースープ・グループ

2009年3月3日(火)～4月19日(日)
出口 (2005年)

■第6回：ミッチェル・ローズ + BodyVox

2009年1月27日(火)～3月1日(日)
現代の白昼夢：ディア・ジョン (2001年)、現代の白昼夢：中空の鳥々、
(2001年)

■第5回：榎原澄人

2008年12月16日(火)～2009年1月25日(日)
浮楼 (2005年)

■第4回：シガリット・ランダウ

2008年11月1日(土)～12月14日(日)
Phoenician Sand Dance (2004年)

■第3回：田口行弘

2008年9月17日(水)～10月31日(金)
Moment-performative Installation- / Moment-performative
installation- (2007年)、Moment-performatives spazieren- /
Momena-performative wandering- (2008年)、Ordnung / Order
(2008年)

■第2回：ロイック・ストラニー

2008年8月5日(火)～9月15日(月・祝)
現地調査 (2005年)、神様の味 (2008年)

■第1回：シンイル・キム

2008年6月28日(土)～8月3日(日)
ドア (2003年)、球体 (2003年)、アクション (2004年)